

造幣局へ入局。

昭和20年4月課程修了後は各自の住居に近い勤務地へ就職となり、私は造幣局の研究課に入りました。最初は電解銅の純度分析で少数以下4桁までの数値が合うまでやらされました。何しろお金の分析なので厳しいのです。職場では男性の応召が相つぎ、課長だけ残りました(昭和20年6月)。陶器のお金が検討されるようになって椅子の上から落下させては強度など計りました。空襲があると局では地下室に退避しましたが、そこには土嚢が積まれており、中身はお金だともまた白金や金の地金とも聞き及びました。(真偽の程は不明です)

戦争が終わり、時代が変わる。

空襲も再々で戦争は終局へと、そして8月15日の玉音放送を研究室で聞きました。敗戦とは…

造幣局は米軍に接収され、正門にはMPが立つようになりました。

入局して間のない私には難しいことは解りませんでした。工員さんの入退局時のお風呂場を通っての全身検査はなくなったようです。その年のクリスマスには米兵と合同でコーラス部も入ってパーティーが開けられました。

春には、恒例の通り抜けが。でもこの終戦後初めての昭和21年春だけ中止されました。私も3月の末で仕事の中身が充実していない職場を去りました。(その頃、タバコも配給で、刻みタバコを古いコンサイズの紙などで巻いて作るようなこともしました。)

昭和21年4月から松下乾電池製造所の研究課に採用され、乗り物のない通勤路を20分ばかり歩いて通勤しました。丁度馬場の宮さん(八幡様)の横をすり抜けるようにして。私の家からお宮さんまでは野原がいっぱいでした。官庁の制服支給に比べ会社は私服でした。化学薬品を使うのであちこちに穴があいて、洋服の調達には苦勞しました。父の白緋の着物でワンピースを作ったこともあります。

心の中は。

物資は不足しても、夜の明るい生活は心が癒され貧しいながらもそれなりの会社生活で青春を過ごしました。昭和23年、復員兵士が多くなり、住居も明け渡しを迫られたので当時橋寺町とっていた太子橋へ引っ越したという次第です。今考えるとこの新森小路に住んでいた10年程は私にとっても世の中にあっても古今未曾有の変化多い時期だったといえるように思います。〈豊田〉

(以上、文中写真は父の撮影製作によるもの)

写真で見る移り変わり

(写真:中村英祐)

昔



昭和30年頃

現在



付近

昔



昭和30年頃

現在



付近